

地域社会を活性化する鍼治療に向けて

人口減少や高齢社会への対応が求められるなか、高齢化により、医療や福祉の関係予算が膨らみ、地方自治体の財政を圧迫しているという話もよく耳にする。一方で、「賑わい」や「活力」を生み出すことが都市計画の至上命令とも言われ、市民税、事業所税、固定資産税を柱とした地方税収を如何に効果的に増やすかが、都市計画に課せられた課題となっている。

全国的に都市部で人口増加を経験していた時代は、公共投資によりニュータウン開発や都市開発を敢行し、夜間人口増の受け皿を供給することで、人口増を市民税や固定資産税等の税収増につなげ、投資した公共資金を長年かけて回収していく分かり易い経済的なメカニズムが成長期の都市計画を推し進めてきたとも言える。

そのような時代から数十年を経た今、生産年齢人口の減少や高齢者の割合の増加の中で、地域に外科手術を施すような都市開発は必ずしも自治体の税収増につながらず、逆に造った施設を維持するための自治体の財政負担の増加にもつながりかねないと、新規開発に二の足を踏む自治体も少なくない。

外科手術を施す体力もない地域が多い中、地域が知恵を絞り、地域のツボを見つけ出す必要がある。人間に体のコリをほぐして血流をよくするツボがあるように、どんな地域や都市にも人々の流

れ（回遊）を良くしたり、人々が集まりやすくするツボがあるはずであり、地域を活性化することは、地域全体の底上げを行うような発想ではなく、都市や地域のツボを探し、ツボを押す鍼治療の方法を施すことに他ならないと思う。地域社会が知恵を出し合い、工夫を凝らすことにより、地域のツボを刺激して活力を生み出していく地域の鍼治療型デザインは、実は全国でもさまざまな形で取り組まれている。古くなった街並みの再生や街なかにある空家をアートギャラリーに再利用したり、低未利用地を再利用してイベント空間として活用したりと、工夫を凝らした事例は全国にあり、そうした事例や経験を知の体系として整理していくことが大学や関連協会に求められている役割とも言える。

地域や都市を人体に例えるならば、大規模な外科手術により、機能不全に陥った部位や古くなって機能を果たし難くなった部位を外科手術によって造り替えたり、新たな機能を埋め込んだりするような改造を現実の社会経済情勢の中で施すことができるのは、日本列島全体の中でもごく一部の地域や都市に限られてきたとも言える。

また、人口増を成長と捉えるならば、既に成長のピークを過ぎ、成熟化に向かった地域における「活性化」とは、大規模な外科手術のような都市開発でもなく、増加する財政負担のマイナスを極

東京大学大学院 新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻 教授

で ぐち
出 口

あつし
敦



力軽減していくことを意味するのでもない。住民や来街者の営みを「活性化」させることであり、いわば地域や都市を鍼治療するような取組みを意味するが、そのためには2つの考え方がある。一つは、まちづくりは活動から始めることが肝要であり、活動が集まる場（まちづくりのセンター）をまず整えるという考え方である。例としては、新規開発地であるが、千葉県柏市柏の葉地区で、まちづくりの活動が集まる場として2006年11月に設立された「柏の葉アーバンデザインセンター（通称：UDCK）」が国内外から注目されている。また、2つ目は地域や都市のツボを見つけ出し、効果的に公共投資を行い、人の集まり易い活動の場として再生し、地区全体の人の流れや回遊行動を誘発する戦略を練り、整える考え方である。

1992年にリオデジャネイロで開催された環境サミットにおいて、環境都市として一躍世界的に注目されるようになったブラジルのクリチバ市において、バス交通を中心とした5本の放射状の都市軸を骨格とする都市づくりを戦略的に進め、ゴミの分別回収などの環境政策や荒廃した土地の再利用などの施策実施において手腕を発揮した元クリチバ市長のジャイメ・レルネル（Jaime Lerner）氏もその著書（「都市の鍼治療—元クリチバ市長の都市再生術」中村ひとし・服部圭郎共訳、丸善、2005年）の中で、「都市の鍼治療」型のまちづく

りを提唱している。

衰退したと言われている多くの地域でも、まだ地域で暮らし続けたいと願っている大勢の人がおり、地域に投資できる資産までもがなくなってしまったわけではない。日本の安い金利で貯蓄している地域の資産の一部でも年2～3パーセントの金利を伴う投資先が創り出せれば、地域の資産を地域に投資し、活用して、地域の経済が活性化するのはである。

一方で、高齢社会は長生きしたいと長寿を願望してきた人類が長年求めてきた社会の姿であるにもかかわらず、マイナスイメージで捉えられがちなのはなぜだろうか。本来、健康な高齢者が増えることは誠に望ましい姿とも言えるはずであるが、現実には定年退職して社会との接点が切れ、病気がちになってしまう高齢者の方の話をよく耳にする。地域のために仕事をしたいと考えながらも能力を発揮する機会が身近にないご年配の方々も少なくないはずである。女性も同様である。

地域の活性化は、近年さまざまな場面において多用される用語であり、その意味するところは地域により異なると思うが、①年齢や性別を問わない地域に眠っている人材の活用、②眠っている資産の循環と投資、③地域や都市の鍼治療型まちづくり、の3点を地域の活性化が目指すべき方向の3本柱として強調しておきたい。